

「読解力」を巡る一考察

上野 昂志

評論家

(抄録は不掲載)

本稿ご執筆の上野先生は、抄録の作成を、「これは論文ではない。・・・すべては文章の流れの中にある。云々」として、作製されませんでした。編集部としては、そのお考えを尊重することを約束し、執筆を依頼させていただいたので、抄録は省略します。

また、元々の抄録がないので、英文表記に関しても同様に、不掲載とします。タイトルについても、文意を正確に伝えるのは困難として英文は記述されませんでした。深い意味で真意を伝える翻訳は極めて難しいという点は編集部も同感ですので、英文は掲載しません。

異例の対応ではありますが、編集部では人文系の評論等ではこういう考え方も充分にありえると考えます。また、編集部といたしましては、人文系論文において、「抄録」とはどういう内容であるべきかに関する問題提起も含めさせていただきたいと考えます。

以上の点につき、読者の皆様のご理解をいただけるようお願い申し上げます。

(文責・編集発行人)

1. 読解力不足です

高校生や大学生の文章を読み取る力の衰え、すなわち「読解力」不足については、以前から、現場の教師や指導者から指摘されていたが、昨年末、経済協力開発機構（OECD）が2000年から3年ごとに実施してきた、世界の15歳を対象にした「学習到達度調査（PISA）」で、日本が、2018年の「読解力」の平均点が前回より落ち、順位も8位から15位に下がったというニュースが流れて、改めてこの問題がクローズアップされた。

2019年12月4日の朝日新聞は、1面トップに“「読解力」続落 日本15位”と大見出しの文字が踊り、それにつぐ本文は、以下の通り。

「調査では、79の国・地域で約60万人が参加。日本からは統計手法に基づいて抽出した183校から高校1年生約6100人が参加した。文章や資料などから情報を理解・評価し、考える力を問う『読解力』は前回より12点低い504点（OECD平均487点）で、8位から15位に転落。OECDは、誤差の範囲ではなく、理由のある低下だと分析している」。

この記事と並んで、同紙には編集委員による見解

が「視点」という括りで述べられている。そこでは、「読解力」下落の原因として、「教育のICT対応の遅れ」が挙げられている。つまり、PISAの調査方法が、前回から、紙からコンピューターを使う形になり、ブログや電子メールなどを対象とした「デジタル読解力」になったのに対して、日本の教育環境では、それが決定的に遅れているというのだ。たとえば、小中高校のパソコンは児童生徒5.4人に1台で、授業でデジタル機器を使う時間も、OECD加盟国で最下位であるように、と。

確かに、この「視点」が説くように、日本の学校教育におけるICT化の遅れということが、日本の高校生にとっては、デジタル機器を駆使した設問その他に対応していくのが不得手で、今回のような結果になったという面はあるだろう。だが、それはあくまでも、問題の一面に過ぎない。「読解力」不足ないしは欠如という事態は、たんに高校生だけの問題ではなく、大学生にも社会人にも見られる現象だからだ。

ならば、その大本の原因は、どこにあるのか？

誰もが、自身を含めて周りを見渡せばすぐわかる

ように、若年層を中心にして、日本人が本を読まなくなったからである。読解力は、ネット上に流れる断片的な情報を集めても得られるものではない。新聞・雑誌等も含めて、総じて本を読むことを通じて涵養される。本を読まなくなれば、読解力も失われる。読解力を失うということは、ものごとを深く考え、想像する力も失うことにもつながる。だが、なぜか日本人は、ごく一部を除いて本を読まなくなった。そして、これには知的文化の変容という歴史的な経緯がある。

だが、その問題に入る前に、現在の読書をめぐる様子を思い浮かべてほしい。たとえば、電車の中で、本を読んでいる人がどれだけいるかを。わたしは、フリーの仕事なので、たいていは午前も遅い時間の、空いている電車に乗ることが多いのだが、立っている乗客が少ないゆったりした車内でも、本を読んでいる人が10人を超えることは滅多にない。残りの大多数は、スマホを覗いているか、居眠りしているかだ。これが朝夕の通勤列車となればいわずもがな、であろう。しばらく前から問題になった出版不況は、このような事態の結果である。

かかる現象は、むろん、スマートフォンが普及・浸透してからのことだが、日本人の読書離れは、それ以前から進行していたと思われる。

以下、その歴史的変遷を、わたし自身の経験を踏まえて辿ってみる。

2. 学生と読書・戦前編 旧制高等学校と教養主義

学者や研究者、あるいは小説家や評論家、その他それに類する物書きなど、要は文筆を業とする人々が本を読むのは当然すぎて、いうまでもない。では、そのような仕事に携わる人たち以外で、よく本を読むと思われる人々は誰か。かつて、それは学生であった。かつてと強調するのは、現在の学生は、ごく一部を除いて、教科書や参考書など直近の必要書以外は、ほとんど本を読まなくなったからである。

昔は、というのは、戦前はもとより戦後も一九七〇年代までは、学生もよく本を読んだ。そのことを「教養主義」という知の文化が辿った変化を歴史的に検証したのが、竹内洋氏の労作『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』（中公新書・

2003年）である。

竹内氏は、わたしより一歳下だから、同世代で、その経験は、わたし自身のそれと重なる点が少なくない。ただし、竹内氏のご自身を「プチ教養主義者だった」とされているが、わたしの場合はそうでなかったという違いはある。それは、お互いが学生だった一九六〇年代のところで、微妙なスタンスの違いとして見えてくるように思うが、とまれ、本稿ではまず、氏の『教養主義の没落』に拠りながら、かつて読書階級の一翼を担っていた学生における読書の歴史的変遷を辿っていく。

では、まず「教養主義」とは何か？

竹内氏は、「教養主義というのは哲学、文学など人文学の読書を中心にした人格の完成を目指す態度である」として、「東京帝大講師ラファエル・ケーベル（原名・生没年略・以下同）の影響を受けた漱石門下の阿部次郎や和辻哲郎などが教養主義文化の伝達者となった。『三太郎の日記』や『善の研究』が刊行されることによって、旧制高等学校を主な舞台に、教養主義は大正教養主義として定着する」とされる。⁽¹⁾

ここで注目すべきは、「旧制高等学校を主な舞台に」という指摘である。阿部次郎の『三太郎の日記』（1914年）はもとより、それに先立つ西田幾多郎の『善の研究』（1911年）も、旧制高等学校の学生の必読書だったのだ。当時、中学校以上の高等教育を受ける者がきわめて少ないなかで、旧制高等学校の学生といえば、まさに知的エリートの集まりだったろうが、教養主義は、そこで醸成されたということだ。

だが、同じ阿部次郎が、世の人々が人格の陶冶によって結ばれる社会を理想とすると謳った『人格主義』を発表した1922年になると、風向きは変わる。「労働者は資本家も愛し、人格として尊重すべきという阿部の主張は、ブルジョアジーに現状維持の口実をあたえるものである」⁽²⁾ というような批判がなされるのだ。

1910年代から20年代にかけての、このような変化の背景には、1918年の「米騒動」や、同年12月の東京帝国大学法学部学生たちの新人会の結成、さらには同経済学部助教授・森戸辰雄による、『相互扶助論』で知られるアナキストのクロポトキンの紹介

(1919年・森戸は、これにより禁固三か月、罰金七〇円の刑を受け失職する) など、第一次世界大戦後の社会変動とともに、社会主義思想やマルクス主義の紹介・普及があるだろう。

その一方、エリート中のエリートが集まる東京帝国大学法学部学生が社会主義による啓蒙活動を始め、また森戸辰雄のような帝国大学の助教授がクロボトキンの紹介をしたことによって、それまで社会主義者や社会活動家といえば、壮士ふうの野蛮なアウトローと見做されていたものの、ステータスが向上したと言われるのである。

そこから、お洒落な「マルクスボーイ」なる者が、銀座通りあたりを闊歩することにもなったのだろう。

閑話休題

エリート学生の、人格主義的な教養主義から社会主義的な啓蒙への変化は、大きくは社会状況によるものだが、竹内氏は、もう一つ重要な要因として、教養主義の内部において「象徴的暴力」が作用する点を指摘している。どういうことか？

「教養主義とは、万卷の書物を前にして教養を詰め込む預金的な志向・態度である。したがって、教養主義を内面化し、継承戦略をとればとるほど、より学識をつんだ者から行使される教養は、劣位感や未達成感、つまり跪拝きはいをもたらず象徴的暴力として作用する」と(3ルビ原書)。

砕いていえば、こういうことだ。いろいろ本を読んで教養を高めようとする。それで、先輩などに、これこれを読みましたというと、なんだ、その程度か、じゃあ、これは読んだか、あれはどうだ、などと反問されて真っ赤になり、嗚呼、オレはまだまだダメだ、もっともっと勉強しなきゃ・・・と頭を垂れるという次第。

こういう光景は、旧制高等学校では日常的に見られたのだろうが、戦後の大学でも、これに近いようなことがあったと思う。それを、教養主義における象徴的暴力と捉えたのは、竹内氏の卓見である。

社会主義的な啓蒙を旨とする活動は、このような教養主義の象徴的暴力を振り払うことができる。なんだ、お前ら、書齋に閉じこもって、あれこれの書物を読み、人格を高めるなどといったところで、この現実社会にとっては、なんの役にも立っていない

じゃないか、と。あるいは、マルクス主義をかじって、もう少し論理的に批判するとしたら、先の阿部次郎の『人格主義』を批判したときと同様に、そんなものは「ブルジョアジーに現状維持の口実を与える」に過ぎないと切って捨てることのできるというわけだ。

だが、ここで忘れてならないのは、教養主義の象徴的暴力を振り払う、鬼に金棒のマルクス主義もまた、その関連の書物から得られたものだという点である。そんな文献を読むことができたのは、旧制高等学校や大学の学生であろう。その点について竹内氏は、以下のように明快に述べている。

「マルクス主義は教養主義を蔑む理論的砦とりでともなったから、教養主義の鬼っ子だった。しかし、マルクス主義が読書人的教養主義であるかぎり、教養主義内部空間での反目抗争であるから、両者は反目＝共依存関係にあった。だからこそ従来の教養は「旧い教養」でマルクス主義こそ「新しい教養」とみなされたのである」。(4ルビ原書)

ちなみに、大正時代の終わりには、もっとも頭の良い学生は「社会科学」を、2番目の連中は「哲学宗教」を研究、3番目が「文学」に走り、最下位が「反動」といわれたらしい。最下位を別にすれば、向かう対象は異なるとはいえ、皆さん、それなりに一所懸命読書に励んでいたんですね。

だが、東京帝国大学法学部で形成された新人会(新人会も、初期においては吉野作造などの影響による、人道主義的社会主義による啓蒙活動が主で、1921年に学生団体として改組されて以後は、左傾化を強めていったといわれる)が、再建共産党が一斉検挙された「3.15事件」(1928年)のあとは、大学による解散決議がなされ、1930年代になると、社会主義運動は弾圧され、社会の表からは消えていく。

当然ながら、大学のキャンパスからもマルクス主義は一掃されたわけだが、その空白地帯に、新たな教養主義として登場したのが、自由主義者の河合栄治郎の企画・編集・出版による『学生叢書』である。1936年の『学生と教養』を皮切りに『学生と生活』、『学生と先哲』、『学生と社会』、『学生と読書』・・・と1941年まで12冊に及ぶ『学生叢書』は、河合の単著『学生に与う』(1940年)とともに、その理想主義や人格主義によって、戦時体制が強化される時代

の学生に精神的な拠り所として受け入れられたばかりでなく、戦後の教養主義にも影響を及ぼしたといわれる。

なお河合栄治郎は、英国留学中に学んだ社会政策論が専門だが、五・一五事件（1932年）が起きると『五・一五事件批判』を、「二・二六事件」（1936年）が起きると、その批判を書にするというようにファシズム批判を展開する「戦闘的自由主義者」でもあった。そのために右翼の攻撃を受け、1939年に東京帝国大学教授の地位を追われるのである。

3. 学生と読書・戦後編 教養主義の行方

戦後10年目の1955年、京都大学では、教養部の学生の読書調査がなされ、そこで教養書を月に何冊読むかというアンケート調査が行われた。アンケートによると、10日に1冊は教養書を読む。ほとんど読んでいないと答えたものは一・八パーセント。教養書の読書時間は一日一・八時間で、九三パーセントの学生が教養書を読む時間がもっとほしいと回答している。

さらに、最近読んだ教養書の中で感銘が深かったもののリスト第一位は、『ジャン・クリストフ』、また、次の書物の中で読んだものは、という問いには、『若きウェルテルの悩み』七一・六パーセント、『善の研究』二五・四パーセント（文学部では四七・一パーセント）、『経済学教科書』二二・五パーセント（経済学部では六三パーセント）だったという。⁽⁵⁾

以上の結果を踏まえ、竹内氏は、「七一・六パーセントもの学生が『若きウェルテルの悩み』を読んでいたのかと疑う向きもあるかもしれない」としたうえで、実際は読まないで、回答では読んだことにしている学生がいたとしても、そこには「教養書は読まなければならない、という正当文化への信仰告白はみえてくる」という。

信仰告白とまでいなくても、学生たるもの、当然読んでおくべき本は読まねばならないし、たとえば、いま読めなくても、いずれは読もう、という意識は、1950年代の学生にはあったのだろう。そして、1960年代の初め頃までは、学生の間でそのような気分は残っていたと思う。その意味で、教養主義は、そのありようを変えながらも生きていたのである。

旧制高等学校は、1947年の新学制の交付により、1950年に廃止される。この間に、新制高校も新設され、いろいろ混乱もあったようだが、ともかく、旧制度のもとでのエリート学生養成を誇った旧制高等学校はなくなる。しかし、そこで培われた教養主義は、戦後の新制大学において息を吹き返し、少なくとも60年代までは、学生の意識を捉えていくのである。何故なのか？ その点について、竹内氏は、以下のように分析する。

「戦時期において大学や高等学校、専門学校教育は修学年限が短縮されたり、卒業が繰り上げられたり、授業が停止されたりした。工場などへの勤労動員もなされた。徴兵延期が取り消され、在学中に大学生も戦場におくられた。教養主義もマルクス主義も軍国主義の中で弾圧された。一方で、軍国主義による破局への道があった。旧制高校をはじめとする高等教育文化の解体や教養主義の衰微と軍国主義の昂進は共変関係にあった。共変関係はしばしば因果関係に読み替えられやすい。高等教育文化の解体や教養主義やマルクス主義が抑圧されたがゆえにあの戦争があったのだ、教養主義やマルクス主義の復活こそ軍国主義にならないためのものである、と。高等教育や教養主義は、殉教者効果をもち、リバイバルに威光がました」。⁽⁶⁾

このように戦後復活した教養主義に反撥したのは、石原慎太郎である。石原の存在が脚光を浴びるのは『太陽の季節』（1955年）だが、その前に書かれ、『復刊第一号 一橋文芸』に掲載された処女作『灰色の教室』が、一橋大学内の書評会で、「左翼系の学生」たちに酷評されたのが、きっかけになったらしい。

わたしは、この小説は読んでいないが、『太陽の季節』は、芥川賞を受賞する前に、『文學界』で読んでいる。ついで、これと同様映画化された『処刑の部屋』（1956年）や、石原のはじめての長編『亀裂』（1956～57年）も読んでいる。ただし、その後は、大江健三郎の『死者の奢り』（1957年）に惹かれ、以後『芽むしり仔撃ち』（1958年）、芥川賞受賞作『飼育』（同）、『われらの時代』（1959年）・・・と、発表されると同時に読むようになったので、石原の以後の作品とは遠ざかることになる。

それはともかく、竹内氏によれば、『処刑の部屋』

や『亀裂』などで、教養主義的左翼に対するあからさまな反撥や侮蔑を表明した石原も、『灰色の教室』を発表した直後には「社会学的ユマニズム」を提起していたというから、時代の教養主義と無縁であったわけではない。ただ、そこから踏み出した段階で彼が主張したのは、「張って行く肉体がない、頭でっかちの」「観念左翼」への否定である。

確かに、この頃の石原の小説には、ボクサーやボクシングのことがよく出てくるように、「肉体」が強調されてはいる。だが、その「肉体」もまた観念なのだ。むしろ、慎太郎氏自身は、高校の時からサッカー選手として活躍しているように運動神経は抜群で、それあるがゆえに、三島由紀夫の運動センスのなさを、愛情を込めて皮肉ったりしているのだ。しかし、そのような自身の肉体と、それを言語表現においてリアルに描出することとは別である。石原の、観念左翼に対する肉体の誇示は、「肉体」という言葉、観念にとどまっており、それを超えた肉体そのものの不透明さをリアルに浮かび上がらせるには至っていないのだ。だが、にもかかわらず、石原の「肉体」という一語は、書物による知を金科玉条としてきた教養主義に対するカウンター・パンチとなったのである。

とまれ、竹内氏は、そのような石原が「一橋大学という旧制高校・帝大的な文化とは異なるところで学生生活をおくったこと、身近に、左翼インテリ風な学生文化つまり『ロシア型』学生文化とはちがったジャズとダンスとヨットに興じる『アメリカ型』学生文化（裕次郎）をみることによって彼の作風が練りあげられたのだろう」⁽⁷⁾として、さらに石原自身の「寮は貧しい学生の集まりでね」という回想を引いたうえで、「寮の生活は『ロシア型』学生文化であり、『湘南の消費社会の新しい風俗』は『アメリカ型』学生文化である」と書いている。⁽⁸⁾

わたしは寮生活の経験がないので、よくわからないが、竹内氏が、その前に触れている旧制高校的な高橋和己のことなどを思い合わせると、「ロシア型」というのに得心がいく。それに対し、「アメリカ型」の石原慎太郎が反撥・否定したということも。

ただ、「アメリカ型」は、どうだろう。石原にとっては、それは、弟たちが遊ぶ湘南に結びついたものだったかもしれないが、石原より完全に一世代下の

わたしなどにとっては、1950年代前半の中学生の頃から、「アメリカ」は、エルビス・プレスリーの歌から、ジョン・フォードやヒッチコックなどに代表される黄金期のアメリカ映画を通して、身近なものだったのだ。むしろ、それは、自分たちの「型」すなわちスタイルとして消化するまでには到ってはいなかったが、わが同学年の友人のように、『理由なき反抗』（ニコラス・レイ監督・1955年）のジェームス・ディーンを真似て、ジーンズに赤いジャンパーを身に着けるぐらいにはなっていたのである。

つまり、『太陽の季節』が発表された1955年には、一方では、先に京都大学の読書調査で明らかにされたように、大学生の多くは教養書を読んでいたが、それより下の中学生のガキ共の間では、アメリカの音楽や映画やファッションが、興味という以上の嗜好や志向の中心を占めつつあったということなのだ。そして、それは中学生というところに留まっていたわけではない。

当時の若者たち、つまり、十代後半のハイティーンから20代初めの、その多くは学生ではなく、中卒でなんらかの仕事に就いていた（わたしが通っていた世田谷の中学でも、1955、6年当時、卒業生の半数は高校進学をせず、就職していた）人たちの間で流行っていたのは、プレスリー由来のロカビリーであり、ファッションもまた、前髪を盛り上げたリーゼントにジーンズ、底の厚いラバーソウルの靴だった。

渋谷あたりには、小さなロカビリー喫茶がいくつもあり、平尾昌晃やミッキー・カーチスのようなトップ・スターまでは行かない、二線級の歌手が実演をしていた。その最大の盛り上がりは、1958年2月に第一回が行われた日劇「ウエスタン・カーニバル」である。これは、一週間で四万五千人の観客を動員したことで、この手の音楽イベントとしては空前の入りだったという。わたしは、このとき高校生だったが、5月開催の二回目だったかには、友達と一緒にいった。

石原慎太郎を刺激してアンチ「ロシア型」に赴かせた、ヨットやダンスに興じる湘南族はごく限られた富裕層の子弟たちだが、アメリカ由来の音楽やファッションは、下は10代半ばの中学生から、高校生、さらに中卒の非学生ハイティーンに至るま

でを捉えていたのである。むろん、このような現象は、より大きな視点からすれば、戦後の日本社会に押し寄せたアメリカニゼーション（アメリカ化）という潮流によるものである。旧帝大を根城にして残っていた教養主義も、その波に洗われて変質していくのだ。それが顕著になっていくのが、1960年代である。

4. 1960年代 変容する文化

話が読書から外れたが、アメリカの映画や音楽に浸ったわたしでも、こと本になると、アメリカ文学は、小学生の頃に親しんだマーク・トウェイン以外では、エドガー・アラン・ポーぐらいで、フォークナーを読んだのは、大学に入ってからだった。高校生の頃は、ツルゲーネフから始まってドストエフスキーと、もっぱらロシア文学だったのである。その点でいえば、読書は「ロシア型」ということになるのか。といっても、むろん、勉強家ではないから、それに固まったわけではない。前に書いた大江健三郎の小説の場合と同様に、要するに、関心や興味が赴くままに読んでいたというだけのことだ。ただ、魯迅の『狂人日記』を読んだことから竹内好の『魯迅』に出会い、それまで批評文として心酔していた花田清輝の『復興期の精神』（真善美社版）とは異質の対象への迫り方に感動したのが、大学で未知の中国文学を専攻するきっかけになったのだろう。その点では、教養主義ではないが、読書に導かれたということにはなるかもしれない。

1959年に高校を卒業したわたしは、翌60年に大学に進むが、浪人時代は、午前中は予備校、午後は新宿のジャズ喫茶で、レコードから流れる大音響のモダンジャズに浸っていた。その点では、エルビスから始まったわたしのなかのアメリカ音楽遍歴は、ジャンルを変えながら続いていたといえよう。だから、大学に入ると同時に安保闘争の波に呑み込まれたのだが、デモを組んだ「学友」の誰もがモダンジャズを聴いていないことに失望して、解散になると一散にジャズ喫茶に駆け戻ったのである。

大学の同級生に教えられて読んだ本といえば、白土三平の『忍者武芸帖』（1959～1962年・全17巻）がダントツの一位である。これは、三洋社という貸本屋向けの出版社から刊行されていた単行本形式の

マンガなので、普通の書店にはない。その代わりというわけでもないが、ラーメン屋のカウンターの隅や、理髪店の待合椅子の脇に積まれていた。まず、そこでラーメンを啜りながら読み、欠けている巻は貸本屋に行って借りるというようにして読んだのだが、圧倒された。

わたしも、子ども頃は少年雑誌に掲載されたマンガを読んでいるし、手塚治虫には夢中になったことはあるが、それもしばらく途絶えていたのだ。だから、白土の名も存在も知らなかった。それが、この『忍者武芸帖』では、主要人物の造形といい、リアルで強いタッチの絵柄といい、コマからコマ、ページからページへと展開するストーリーの運び、そして、それらを通して訴えかけてくる思想とでもいべきものに引き込まれたのである。そこから、白土三平の『忍者武芸帖』以後の新作を読みたいと、友人とも語り合ったのだが、これが、光文社から出ている『少年』の付録？ としてある『サスケ』のほかはなく、1965年になって、前年に創刊された漫画雑誌『ガロ』に出会うまで、空しく待つしかなかったのである。そして、『ガロ』との出会いが、大袈裟に言えば、以後のわたしの人生を決めるのだが、それは、さしあたって関係ない。

要するに、わたしの場合、マンガにジャズに、それ以前から続く映画にと、サブカルチャーに半身浸かりながらの学生生活だったわけだが、程度の差こそあれ、わが周辺の学生は、似たようなものだった。そして、それは、学部を修了する1964年頃には、より一般的な姿になっていくのである。

大学生がマンガを読む、と世間が揶揄的に問題化したのは、1966年頃だと思うが、その担い手は、わたしなどより5、6歳下の、のちに団塊世代と呼ばれる人たちである。ただ、彼らとて、教養のためなどという意識はなくても、マルクスやヘーゲルの著作を読んでいた。それらとマンガとを、自由に往還するところに、60年代後半の学生たちはいたのである。おそらく、ここでは、1955年の京都大学キャンパスにおけるように、「教養書をどれだけ読んでいますか」というような問いは成り立ちようもなかったのではないか。

ここで視野を少し広げてみると、1960年代は、一方で下からのサブカルチャーの浸透と同時に、芸術

の領域で、カウンターカルチャーというべき事態が進行していたのである。いわば、既存の権威＝エスタブリッシュメントに対するカウンター、対抗・反抗である。

先陣を切ったのは、美術である。ついで、舞踏や演劇、音楽と、前衛的な試みが次々と展開されていったのだ。どこかの社会学者が、60年代の芸術は、政治の挫折から生まれたというようなことを言っていたが、見当違いも甚だしい。先行していたのは、芸術のほうなのだ。

60年代といったが、美術においては、すでに『太陽の季節』が登場した1955年頃から、それは始まっていたようだ。この時期のことは、60年代になって記録を通して知ったのだが・・・たとえば、55年の10月に開かれた具体美術協会第一回東京展では、白髪一雄が泥に挑む作品というのがあるが、それは、絵具の泥の中に飛び込んだ半裸の白髪が、泥と格闘しているのだ。また同展での村上三郎は、畳一畳大の枠に張った紙を何枚も立ち並べたところに全身でぶつかって、紙を破るアクションを行っているのだ。このような白髪たちの試みは、60年代には、アクション・ペインティングとして一般に知られるようになる。

それまでの常識からすれば、美術といえば、絵画や彫刻が思い浮かぶが、白髪などの表現は、それらからはるかに逸脱していた。だから、当然ながら、これらは既存の画壇などからは忌避され、非難を浴びる。だが、若い表現者たちは、むしろ、それを良しとして、既存の枠を突き破ろうと、さまざまな試みをしていくのだ。

そのような試みが、互いにおつかりながら渦をまくように顕在化していくのが、1960年の第12回読売アンデパンダンだったが、美術評論家の東野芳明は、そこに出品された彼らの作品（たとえば、篠原有司男のボクシング・ペインティングなど）を「反絵画、反彫刻」と呼んで、以後、「反芸術」という呼称が、一般化していく。

そして、このアンデパンダン展と踵を接するように打ち上げられたのが、「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」、通称、ネオダダである。第一次世界大戦後に、新たな芸術運動として狼煙を上げたダダイズムを突き破るような新たなダダとでもいうよ

うに。メンバーは、吉村益信、荒川修作、赤瀬川原平、篠原有司男、風倉匠・・・である。ネオダダには、有名なマニフェストがあるが、それよりは、銀座画廊で開かれた第一回展についての赤瀬川原平の回想のほうを引いておこう。

「そのネオダダ第一回展の会場には、作品として完成されたものは一つもなかった。だけどその状態が一つの作品目標でもあった。とはいえその完成度と破壊度の関係のジレンマが自分たちの中でも判然としないままに、私たちには破壊的なエネルギーだけがあふれてその銀座画廊内に充満していた。そのエネルギーが作品というものに収まりきれずに、不定形にはみ出してきて、画廊の物品を叩きはじめた。バケツを叩き、洗面器を叩き、ストーブを叩き、画廊の金属類をすべて叩き潰しながら、テープレコーダーを回して騒音の音楽を録音した。それを画廊の窓から街頭に向けて毎日のように放送した」⁽⁹⁾

赤瀬川は、これについて、町一つ隔てた永田町の国会周辺では、毎日デモ隊であふれていた、と書いているが、それはまさに同時代、同時期のことであり、かたや芸術、かたや政治というような、単純な区分けのできない、もっといえば、どちらのアクションも、根は同じエネルギーから発していたのかもしれないのだ。ただ、でありながらも、このときはネオダダのほうが、はるかに過激だったのである。それは、彼らの「作品目標」とするものが、「現実社会に対応する絵画の直接性への熱望だった」からである。

絵画が、額に入れられ、美術館の壁に取まっている限りは、平穏な日常がかき乱されることはない。だが、現実社会に突き出されたその瞬間、平穏な日常に亀裂が走るような無償の表現があり得るか。彼らは、その、ほとんど不可能な想いを具体化しようと、模索していたのだ。それは、このあと、高松次郎、赤瀬川原平、中西夏之の三者が組んだ「ハイレッド・センター」の「東京ミキサー計画」において実践した、山手線内や新橋、銀座の大通りといった場所でのハプニングや、高松次郎の美術館から上野駅まで伸びた紐や、赤瀬川の模型千円札などにおいて、なかば実現したとっていいが、詳細にわたると長くなるので、美術関係の話はこれぐらいにしておこう。

若い画家たちの活動が、東京オリンピックのあった1964年に向かって活発になっていく一方で、ネオダダの第二回展が開かれた1960年7月には、大野一雄、土方巽ら暗黒舞踏派による「DANCE EXPERIENCEの会」による公演が、第一生命ホールで開かれる。彼らの舞踏は、従来のバレエやダンスが、それぞれが理想化した型に学び、習熟していく方向で演じられてきたのに対して、それと逆の方向に新たな地平を切り拓いたのだ。

逆の方向とは、一言でいえば、身体の解放である。自身の身体を型にはめていくのではなく、型から自由にしていって、といっても、それは決して容易なことではない。なぜなら、われわれ平凡な人間にしても、日常の起ち居振る舞いは、既成の型に従って動いているからである。たとえば、歩き方ひとつにしても、自然な二足歩行をベースにしなから、小学校に入れば、整列し、正しい行進をするよう教育される。合理的に身体を使うためには、それが必要だからだ。そして、われわれは、そのようにして習熟した自身の身体を、病気や怪我でもしない限り、意識しない。

暗黒舞踏は、それを改めて意識化し、日常にあって「自然」化した型をずらしたり、揺さぶったりしていくことで、肉体を解き放つ、あるいは肉体そのものに出会う。むろん、それは、常にそのようであろうという模索の、無限に続くプロセスでしかあり得ないのだけれど。また、それゆえに、暗黒舞踏は、多くの後進を生み育てたばかりでなく、舞踏家に移り住んだドイツあたりを起点としてヨーロッパからアメリカへ、「ブトー」として世界に広まったのである。もっとも、そうなると、舞踏もまた場合によっては、型になってしまうという、前衛芸術が陥りがちな罠にはまりもするのであるが。

ただ、ここで注目すべきは、「反芸術」として括られた画家たちが、既存の美術の枠を突き崩しただけでなく、直接性を求めて日常と芸術の境界を踏み越えて行こうとしたことと、暗黒舞踏が、バレエやダンスの型だけでなく、身体を規制する日常的な型からの解放を目指したことは、その志向において共通しているという点である。そして、1960年代の演劇も、そこを母体として生まれてくるのである。

「劇団状況劇場」を率いた唐十郎は、その妻の李麗

仙や、やがて状況劇場の立役者となる磨赤児とともに、土方巽の門下生だったのだ。土方巽は、その独特の論理と言葉遣いによって、人を動かす力を持っていたが、唐以下の弟子たちも、大いに影響を受けたと思う。

劇団状況劇場が、唐十郎の処女戯曲「24時53分塔の下行きは竹早町の駄菓子屋で待っている」を、日立レディス・ホールで上演したのは、1964年4月のことである。以後、毎年、公演を行うが、66年4月に、「腰巻きお仙—100個の恥丘」が新宿区の戸山ハイツで野外劇として上演されたあたりで、既存の劇場から街中に出ての公演が考えられていたのではないか。それが、状況劇場のシンボルともいべき紅テントでの公演として実現するのは、67年1月の新宿ピットインでの「ジョン・シルバー」と、続く5月草月会館ホールでの「ジョン・シルバー/新宿夜泣き篇」上演のあと、7月のことだ。新宿は花園神社境内に紅テントを打ち立てての、「腰巻きお仙—義理人情いろはにほへと篇」である。最初、神社側から「腰巻」は、「国体」（国民体育大会ではありませんよ！）に反するという、訳のわからないクレームがついたので、「月笛お仙」と改題したが、一週間後には「腰巻お仙」に戻ってしまった。

状況劇場は、従来の新劇の殻を打ち破ろうとするところから出発した。どういうことか？ 従来の新劇は、脚本を頂点として、演出家がそれを解釈し、俳優がそれを舞台上で具体化するという、いつてみれば、頂点のテキストから舞台へという縦方向で作られ演じられてきた。唐たちは、それを転倒させたのである。彼の『特権的肉体論』が、その理論的な支柱でもあるが、舞台上で実際に演じる俳優の肉体を顕現させようとしたのである。実際、紅テントの舞台では、磨赤児をはじめ、大久保鷹、不破万作、四谷シモンなどの肉体が躍動し、それに、われわれ観客の目が惹きつけられたのである。

だが、従来の新劇に対する批判から出発するというのは、状況劇場ばかりではない。1960年代半ば以後に出発した、若い演劇人による新しい劇団は、鈴木忠志の劇団早稲田小劇場にしろ、寺山修司の天井桟敷にせよ、批判の力点をどこに置くかの違いはあっても、その点は共通していたのである。

さて、1960年代に、それまでの芸術に地殻変動と

でもいうべき変化を起こした動向を、美術、舞踏、演劇と辿ってきたわけだが、当然ながら、音楽でも、ジョン・ケージから刺激を受けた若い音楽家のなかでも起こっていた。ただ、残念ながら、わたしは、その方面について、見聞も知識も乏しいので、触れることはできない。

ならば、ここで改めて、このようなカウンター・カルチャーの波のなかで、若者たちはどうしていたか、とりわけて彼らと読書の関係はどうか、というところに戻らねばならないだろう。だが、前にも述べたように、60年代の芸術的前衛は、その志向や人脈において、美術も舞踏も演劇も、さらには音楽まで、重なり合って動いていたのである。従来のジャンルわけによる分類が可能になるのは、あとからの歴史的なパースペクティブによってなのだ。簡単にいえば、当時は、たまたま画廊でネオダダを見て、興味をひかれて追っかけてみたら暗黒舞踏に出会い、新しい世界を知るというように、人は動いていたのである。だが、やはり、入り口として、もっともポピュラーだったのは、演劇であろう。実際、若い観客が集まったのは、紅テントの状況劇場や、天井敷だったのだから。

そして、読書に関わって、当時の中学生や高校生、さらには大学生にも、気分として強くアピールしたのは、寺山修司の、「書を捨てよ、町へ出よう」という Manifesto であろう。

『書を捨てよ 町へ出よう』という書名の評論集が芳賀書店から刊行されたのは1967年だが、翌年には天井敷の第7回公演として上演され、1971年には、寺山自身の監督で映画化もされている。それだけ、この言葉には想いがあったのだろう。

中城ふみ子の『乳房喪失』に触発されて、歌人として出発した寺山修司は、1950年代末から評論、詩、演劇、映画、さらには競馬評論と、マルチな才能を発揮していたが、60年代半ばには、青少年のカリスマ的な存在になっていた。そのため、この Manifesto も、若者たちには、インパクトをもって受け止められたと思う。

だが、これが秀逸だと思うのは、「町へ出よう」というのが、すでに述べたような芸術運動とも暗黙のうちに連動していたからだ。美術でいえば、美術館からその外の町へ出たのであり、演劇でも、状況劇

場は、既存のホールから町に出たのだから。寺山自身が実際に町に出たのは、だいぶあとの1975年の市街劇「ノック」においてだが（彼はそのため住民から不審者として警察に通報される）、それ以前でも、天井敷敷内の舞台と客席との境界を取っ払おうと、様々な試みをしていたのである。さらにいえば、彼ら表現者とは別に、学生たちは、ベトナム反戦を旗印に町へ出た。

しかし、寺山自身は、教養主義的な知のあり方を嫌悪していたにしても、書に育てられたのであって、その意味では、書を捨ててはいない。ただ、既存の書物のなかだけに、知識や、論理や、それこそ教養を求めるのではなく、町という表象を通して現実の世界と出会え、そこには新しい知があるぞと訴えたのである。その点では、『家出のすすめ』（1963年）が、文字通り若者に対して家出をすすめるというより、最終的に精神的な自立のすすめであると同様である。実際、彼の言葉を丸のまま鵜呑みにするほどナイーブな子どもは別にして、大半は、書は書として読んでいたはずである。ただ、すでに、知のあり方が大きく変動したなかでは、教養のために貯金をするように「詰め込む」式の往時の教養主義的読書は、この段階で、ほとんど地を払ったのではないか。

では、当時とその後現在に到る時代の変化のなかで、学生たちの読書量は、どのように変わったのであろうか。

時間は少しずれるが、判断材料としては絶好の調査記録が、『教養主義の没落』に出ているので、それを見てみよう。

それは、竹内氏が、教育社会学者の山口健二氏の読書調査による、1964年と1994年の学生の書籍購入の比率を紹介し、さらに、それを修正してより具体的な比率を出している箇所である。

「山口によれば、一九六四年に購入された書籍のうち、短大生・大学生によって購入されたシェアは三二パーセントである。これに進学予備軍である、中高生を加えると、書籍の半数近くは学生によって購入されていた。それから三〇年後一九九四年の短大生・大学生の書籍購入シェアは八パーセント。四分の一に落ちている」。

この調査に対して、竹内氏は、「六四年と九四年では、潜在読書人口に占める短大生・大学生の割合が、かなりちがっているはずである。それを考慮した実質低下率でみれば、四分の一どころではないはずである」として、六五年と九五年の潜在読書人口（一五歳～六四歳）と大学・短大在学者数をもとにした計算を示される。それぞれ細かい数字を省いて書くと、六五年の潜在読書人口のうち「大学・短大生は読書人口の一・六パーセントを占めていた」、対して、「九五年の大学・短大生は読書人口の三・二パーセントを占めていた」。つまり、六五年から九五年の三〇年間で、大学・短大の潜在読書人口シェアは、一・六パーセントから三・二パーセントへと二倍に増えている。ということは、九四年の大学生の書籍購入の実質的シェアは、六四年の四分の一ではなく、八分の一以下ということになる、というのである⁽¹⁰⁾。

こうして、数字で示されると、1960年代半ばからの30年で、学生がいかに本を読まなくなったか、ということがよくわかるが、それには、大学の進学率が一七・〇パーセントだった1965年から、10年後の1975年には、三七・八パーセントと倍増した大学のマス化（以後さらに進む）とともに、日本社会の高度消費社会化が進行していくなかでの大学のレジャーランド化が影響しているであろう。

現在は、その94、5年から4半世紀経っているわけだから、冒頭で触れた電車の中の読書風景に垣間見えるように、事態はさらに進んでいるというしかない。読書は、一部の人のものになってしまったのだ。その結果、専門家を含めて、本を読む人と読まない人の差が、昔よりはるかに大きくなった。つまり、読書に関しても分断化が進んでいるのである。

寺山修司が、あのような маниフェスト を掲げられたのは、学生はもとより、大方の人にとって、本を読むことが当たり前だった時代だったからだ。だからといって、いま、それと逆に、「スマホを捨てよ、書に還ろう」といったところで、なにそれと一笑に付されるのがオチだろう。

むろん、そうはいつでも、中高生から大学生の「読解力」不足を、そのまま手をこまねいてみているわけにもいくまい。ならば、どうするか？ ここからは、教育の問題になる。

わたしは教育の専門家ではないから、ろくなことは考えられないが、まずは、保育園や幼稚園の段階で、幼児に本の楽しさを体感させることが大切だろう。おそらく、そのあたりのことは、心ある保育士や幼稚園教師が読み聞かせなどで実行しているのだろうが、それには、彼らが本の選択などをはじめ、余裕をもってやれるような施策がバックアップされねばならない。

また、小中学校などでは、いまだやられているのかどうか知らないが、読書感想文などは止めたほうがいいと思う。あれで、本嫌いになる子が少なくなからだ。というのも、本を読むまではともかく、それについての感想文を書かされるとなると、学校教育に慣れたアタマの良い子は、教師の意図を組んで、本から、道徳的にためになると思われるところを示して感想とするのに対して、そうでない子は、見当はずれのことを書いて、教師に注意されたりするからである。そんな子が読書離れするのは当然だろう。

本を読ませることが主なら、まず、いわゆる教育的な配慮をカッコに括って、本の面白さを知らせることが第一だろう。それには、担当する教師が、面白いと思う本を選ぶところから始めて、生徒に読ませたら、感想文など求めずに、彼ら一人一人が気に入ったところや、面白いと思ったところを指摘させる、あるいは、そのまま抜き書きさせるだけのほうがまだましだろう。このあたりは、担当する教員諸氏に研究を重ねてもらいたい、それととも、忙しすぎるといわれる教師たちに、時間的な余裕を与える施策が欠かせないであろう。

こと教育となると、なんとも凡庸な考えしか思いつかないが、このあたりは、現場の教員の意見を訊きたいところだ。ただ、読解力は、たんに学力に関わる問題ではなく、人が、この夥しい情報が錯綜する世界を生きていくうえで、情報の正否を読み分け、自己が進むべき方向を的確に把握していくためには必要不可欠な力だから、その不足や欠如を放置しておくわけにはいかないのである。

参照

- (1) 『教養主義の没落』 P 40
- (2) 同 P 43

「読解力」を巡る一考察

- (3) 同 P 54～55
- (4) 同 P 55
- (5) 同 P 66
- (6) 同 P 198
- (7) 同 P 80
- (8) 同 P 81

- (9) 赤瀬川原平『いまやアクションあるのみ！ 〈読売アンデパンダン〉という現象』（筑摩書房、1985年）P 137～138
- (10) 『教養主義の没落』 P 221～222

受付日：2020年5月10日

